

竹細工の作品と作家

別府の竹細工職人たちは、長年にわたって素材としての竹の可能性を探求してきました。その事例の多くは、別府市竹細工伝統産業会館で見ることができます。

大きな作品の「雲龍」は、1993年に田辺幸竹斎（1935年生まれ）によって6か月をかけて作られました。中心部分は天に昇る龍を表現し、周りの部分は雲を表しています。その近くには華麗な「お駕籠」があります。駕籠は江戸時代に重要な人物を運ぶために使われていましたが、これは当時使用されていた駕籠の約2倍の大きさがあります。この作品は、二宮敬竹が4か月をかけて完成させました。

別府市竹細工伝統産業会館には、皇室のご訪問の際に作られた2つの椅子「天皇の椅子」もあります。この椅子の背もたれと座面は竹でできています。当時の天皇陛下は2000年の訪問時にこの椅子に座られ、また2008年に秋篠宮殿下と紀子様が訪問された際にもこれらの椅子をお使いになりました。皇室が使用した物が、このように展示されることは非常に珍しいことです。

また、展示されている竹製の帽子は、当時の職人の商品開発の努力を示す意味で注目すべき物です。もともとは1950年に開発された物ですが、現在は生産されておらず、今ではオーダーメイドで作るしかないでしょう。

これらの作品の多くは、別府など大分県出身の職人たちによって制作されたものです。これらの中でも最も重要な人物は、別府出身の生野祥雲斎（1904年～1974年）で、彼は竹細工の分野で日本で初めて人間国宝になりました。多くの人が、祥雲斎は日本で最も影響力のある竹細工職人の1人であり、また竹細工を芸術の域にまで高め、「雲龍」の作者である田辺幸竹斎をはじめ多くの職人たちを育てるなど、大きな役割を果たしたと考えています。祥雲斎はもともとは絵画や彫刻に関わりたと思っていたのですが、幼い頃から体が弱かったため絵画や彫刻の道は諦めたのです。しかし19歳の時に祥雲斎は竹で作った花かごに出会い、それに触発されて竹細工の修行を始めたのです。

別府出身の岩尾光雲斎（1901年～1992年）は、1917年に独立し、さまざまな展覧会で高い評価を得ました。光雲斎は竹細工の振興に努め、最終的に100人以上の若い職人の育成に携わりました。そして光雲斎は1969年に、日本の最高の竹細工職人の一人として公式に認められたのです。

先代である父に教えられた別府生まれの職人の白石白雲斎（1918年～2012年）は1970年代に初の展覧会を行ってから、全国の展覧会に作品を出品し続けました。白雲斎は特に、荒々しく、無造作に交差しているように見える編み方の「やたら編み」を得意としていました。

別府の近くの国東市に生まれた佐藤竹邑斎（1901年～1929年）は、小学校を卒業した後に竹細工の修行を始めました。東京と京都で籠の染色を学んだ後、竹邑斎は1922年ごろに大分に戻って自身の作品を作り始めたのです。竹邑斎は高級な花かごの名人で、皇室に7個のかごを献上し、また祥雲

齋の師匠でもあります。残念なことに、竹邑齋は 28 歳という若さで急逝してしまいます。しかし竹邑齋の影響は今でも生き続けているのです。